

言語発達という側面から学習者の発達過程を明らかにしようとする研究に Processability Theory (以下 PT) がある。PT は Pienemann (2005、2008) が中心となって展開している理論で、母語習得においても第 2 言語習得においても、言語知識の発達は学習者の処理可能な範囲に限られるとされ、学習者の母語の違いからではなく、共通性から発達過程を捉えようとするのが大きな特徴であるとされる。そして、PT においては、学習者の発話にある構造が産出されたかどうかで、その構造に必要な文法知識が習得されたとみなされるため、kawaguchi(2010、2015)、岩崎 (2013) をはじめとする日本語における発達過程において PT を検証すべく行われてきた研究の多くがインタビューや絵描写などのような口頭産出データを対象としていた。

しかし、複数の課題で口頭産出データを大規模に取ることは非常に難しく、また第 2 言語環境にない学習者にとって口頭産出課題は負担が大きいという事情もあり、作文などの筆記課題においても PT の検証が可能かどうかを検討しようとする研究もある (Michimoto2016)。Michimoto は検証の結果、筆記課題においても PT の実証は可能であると結論付けている。

そこで、本稿では拡大 PT の仮説の 1 つである主題仮説で定義される主題の発達過程が、作文課題においても支持されるのかを検討すべく、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」(I-JAS) に収録される同一課題によるストーリーライティング (SW) とストーリーテリング (ST) を口頭課題と筆記課題の産出に違いが見られるのか検討する。日本語において主題は口頭と作文では産出の傾向が違うことが指摘されている (野田 1996)。どのような傾向が見られるのか検証したい。

そこで、本稿では①主語の主題化 (は)、②付加詞の主題化 (は)、③目的語の主題化 (は)、④「格助詞+は」の主題化について、口頭産出において主題化が確認できた対象者数と作文産出において主題化が確認できた対象者数を比較した上で、口頭で主題化した文が作文でどのように産出されるのか検討したい。